

異世界転生令嬢、
出奔する5

ミーシャ

ダンジョン都市で
宿屋を営むエルフ。
元金級冒険者でナギの
師匠。

ラヴィル

ダンジョン都市で
活動する白兎族。
金級冒険者で
エドの師匠。

ルトガー

銀級冒険者パーティ
『黒銀』のリーダー。
槍使い。

キャス

銀級冒険者パーティ
『黒銀』の金庫番。
弓使い。

ナギ

『アリア』という辺境伯令嬢に
転生した元OL、現銅級冒険者。
前世の記憶を思い出し、
チートスキルを手に入れた。
美味しいご飯を
こよなく愛している。

エド

奴隷商から
逃げてきた黒狼の獣人。
現在はナギと同じく
銅級冒険者。馬のように
大きな狼の姿、ボメラニアン
のような仔狼の姿にも
なれる。

第一章 ふたたびの、旅路

依頼を受けていない日であっても、新人冒険者は忙しい。

亡き母からの遺産を受け継ぎ、かつ、スローライフを目指しているため本当はあくせく働く必要などないナギにとっても、それは変わらない。

大きな依頼を片付けた後は、細々とした雑用が溜まるからだ。

先日、ナギはひとつの大きな依頼を受けた。依頼内容は、エイダン商会の懐刀と称される、会頭の愛娘リリアーナを商会の支店があるガーストの街まで護衛すること。加えて、料理の腕前を見込まれ、女性冒険者パーティ『紅蓮』のメンバーも含めた食事の用意も任された。

とある事件により男性恐怖症を発症した依頼人のため、【獣化】スキルを使ったエドは仔狼姿のアキラとして、その依頼に同行することに。

道中でリリアーナを貶めた元婚約者が率いる盗賊団の襲撃を阻止し、大活躍したナギたち。

依頼を完遂した後は、醤油が採れるシオの実を採取するため、大森林に足を踏み入れた。無事に目当ての物を手に入れることができたナギたちだが、その先でなんとダンジョンを発見してしまう。未発見のダンジョンの扉にうっかり触れてしまったナギは、いくつかの条件が揃うと起こり得てしまう自然現象——ダンジョンの改変に巻き込まれ、魔力を奪われた。

彼女の魔力と、その欲を吸収して育ったハイペリオン・ダンジョン。

通称『食材ダンジョン』は、まさにナギの欲しいものが詰まった夢のようなダンジョンだった。

ずっと食べたかったカレーの材料である、各種スパイス。そして、醬油の次に欲していた調味料——味噌が詰まったヒシオの実も手に入れることができたのだ。

みりんや日本酒、焼酎にゴマ油。美味しいご飯を作るために必要だった調味料、そして美味しい肉をドロップする魔獣も狩れる素晴らしいダンジョンの発見を冒険者ギルドに報告した二人。

大森林内という人里から離れた危険な立地であるため、食材ダンジョンにはギルドの調査が入ることになり、ナギとエドは調査班の案内役として同行することになった。

ギルドからの正式な指名依頼だが、調査班を結成するには多少の準備期間が必要とのこと、それまでの時間をナギはエドと二人でのんびりと過ごすことを決めた。

庭の畑の世話に果樹の手入れ。新しく手に入れた調味料やスパイスを使って色々な料理作りにも挑戦した。食材ダンジョン内で思い付いた調理器具の製作も工房に依頼済み。

諸々の雑用を片付けた二人は、ギルドに向かう前日に南の『海ダンジョン』にいた。

「せっかく味噌が手に入ったんだもの。新鮮な魚介類をたくさん獲ってこないとね！」

ダンジョン入口の扉に触れて、さっそく目当ての階層へ転移する。

凛々しい表情で自信満々に頷くのは、エド。

「食材の確保は任せてくれ」

「念願のお味噌汁が作れるようになったから、昆布やワカメ、貝も欲しいな」

肉料理は好物ではあるが、前世の記憶が刻まれている肉体が和食を渴望している。

シジミの味噌汁に魚のアラ汁。サバの味噌煮に味噌漬けにした魚も焼いて食べたい。

「明日はギルドに呼ばれているから、日帰りダンジョンになるのは残念だけど」

ため息を吐くナギをエドが優しく宥めてくれた。

「効率よく転移して、欲しい食材を確保すればいい」

そんなわけで、二人は意気揚々と狩りを開始した。

南の『海ダンジョン』でナギが必ず狙うのは、二メートルサイズの巨大なカニのモンスター、ビツグクラブである。

「ぎっしり詰まった身が美味しいし、何よりカニ味噌も楽しめるなんて、最高の食材よね？　こんなのもう、狩るしかない！」

前世日本では、カニは高級食材。一人暮らしOLにとつては、めったに食べられないご馳走である。本物のカニを使ったカニ玉が今生では食べ放題だ。もう、カニカマで代用しなくてもいい！

食材ダンジョンと違って、倒した獲物を目視でまるごと収納できるので、ここぞとばかりに狩りまくった。しばらくは食材ダンジョンに潜ることになるので、魚介類は多ければ多いほどいい。

「ナギ、そろそろ次の階層へ行こう」

「はい。残念だけど、今回はこのくらいで諦めるわ」

ダンジョン内は階層転移が可能なため、目当ての食材がある階層へ跳んだ。

「いた！ ウニ！ サザエもいるわよ、エド」

「分かったから落ち着け、ナギ。怪我をしないよう、これを使え」

黒い棘に刺されないよう、調理用のトングを持たされた。さすが、エド。お礼を言って、ナギは桶を取り出してトングで摘まみ上げたウニや貝をせっせと採取していく。

岩場から離れないナギを狙ってくるシーサハギンをエドは黙々と倒してくれた。

見た目が半魚人な魔物は倒すと小箱をドロップすることがある。この小箱は昆布やワカメに鰹節、沖でしか獲れない魚が詰まっている、文字通りの宝箱。ちなみに、海産物だけでなく、金貨や宝石なども入っている。普通の冒険者のにはそちらが目当ての代物だろう。

エドが倒したシーサハギンを【無限収納EX】に収納して、解体。魔石とエラはそのまま収納して、小箱だけを取り出した。見た目は宝箱そのものなので、わくわくしながら開けてみる。

「金貨が三枚。ダリア共和国のもので、グランド王国のものでもないわね」

「帝国金貨のようだな。宝飾品もある」

親指の爪ほどの大きさのルビーの指輪と繊細な銀細工が施されたティアラだ。

「このシーサハギン、他の海域で沈没船の積荷を手に入れたのかな？」

ダンジョンとは不思議なもので、遠く離れた土地の物がふいにドロップすることがある。

「海の中にあつたはずなのに、劣化していないのも不思議」

「劣化防止の魔術が施されていたんじゃないか」

「ああ、なるほど。お金持ちの帝国なら、やってそう」

資源が豊富なトレニア帝国なら、納得だ。何にせよ、これらのお宝のおかげで金貨十枚以上の稼ぎを得ることができたので、日帰りダンジョンの成果としては上々。

「ウニは手に入れたし、次は貝柱が欲しいな。十階層に行こう！」

「ビッグシェルだな。貝柱のバター焼きが食べたい」

手を繋いで、十階層へと転移する。

ウユニ塩湖に似た十階層は、相変わらず美しい。空の色をそのまま映し取ったかのように広がる海面にはぼつりぼつりと小さな小島が浮かんでいる。

その小島がそれぞれセーフティエリアとなっているため、十階層を拠点にする冒険者は多い。

十階層に棲息するのは、二メートルサイズの二枚貝、ビッグシェル。水魔法を放って攻撃してくることが、陸上では動きが遅くなるため、低ランクの冒険者でも余裕で狩ることができる。

ドロップアイテムは水属性の魔石と真珠、そして貝柱。

「本日のランチは海鮮丼を予定しているので、貝柱がたくさん欲しいです」

「分かった。獲り逃がしたくないから、協力して狩るぞ」

ダンジョンで米酢を手に入れてから、新鮮な刺身を使った海鮮丼が食べたかったのだ。

（ワインビネガーじゃない、ちゃんとしたお酢を使った酢飯。その上に海ダンジョンの新鮮な魚介類を盛り付ければ、最高の海鮮丼になりそう……！）

二人は張り切って、浅瀬へ足を踏み入れた。

「大漁！」

ナギは笑顔で【無限収納EX】の収納リストを眺めた。ビッグシェルを倒して手に入れた貝柱がぎつしりと収納されている。絶景だ。□元が自然と綻^{ほころ}んでしまう。

二メートルサイズの二枚貝から採れる貝柱はかなり大きい。ナギのてのひらを広げたほどの大きさのため、刺身で食べる際には薄く切り分ける必要がある。貝柱のステーキだと、そのまま焼いて食べられるが、本日のランチは海鮮丼。贅^{ぜい}沢に具沢^{ぐたさん}山、大盛りにして食べることにした。

「ドロップする真珠と魔石だけでも結構稼げるから美味しい階層よね。ビッグシェルは弱いし」

「他の冒険者にとってはそうでもないらしいぞ。ドロップ運が関係なく、全素材が手に入るのはナギだけだからな」

「そういえば、真珠はレアドロップアイテムだった」

今回は白蝶^{しらてつ}真珠^{しんじゆ}だけでなく、希少な黒蝶^{くろてつ}真珠^{しんじゆ}も手に入ったので、買取り金額が楽しみだ。

（これだけ在庫があるなら、干し貝柱も作っちゃおうかな）

干した貝柱を使った出汁は旨味が凝縮されているので、炊き込みご飯にぴったりだ。食材ダンジョンで餅米も手に入れたことだし、おこわを作るのも良いかもしれない。

「でも、まずはランチの準備をしないとね。セーフティエリアでお昼ご飯を作っておくから、エドはリストにある食材を集めておいてくれる？」

「分かった。十五階層に行ってくる」

欲しい食材のリストを昨夜のうちに作っておいたのだ。十五階層は立派な岩牡蠣が採れるポイン

トがある。ダンジョン内の牡蠣は食中毒の心配がないため、ぜひとも確保しておきたい食材だ。

張り切って十五階層へ降りていくエドを見送り、ナギはさっそく調理を開始する。

ヤシの木が生えた小島を拠点にして、レッツクッキング！

「まずは、酢飯を作っちゃおう。炊き立てご飯が収納してあったはず」

土鍋で炊いた、少し硬めのご飯が熱々のうちに調味料を合わせるのがポイントだ。

お酢と砂糖、塩を合わせた寿司酢を満遍なく混ぜ合わせていく。しゃもじを切るようにして混ぜていき、お米が艶^{つや}めいてきたら、後は冷やすだけ。

「風魔法って便利！ 団扇^{うちわ}で冷やすのって、大変だったのよねー」

そよ風魔法を使いながら、魚のアラ汁を作っていく。具材はシーサハギンの宝箱に入っていたブリ。鑑定すると、刺身で食べられるほどに新鮮だったので、腹身は海鮮丼に使うことにした。

大鍋いっぱい沸かした湯にアラを投入して、蓋をせずに強火で煮ていく。

吹きこぼれないよう注意しながら、丁寧^{ていねい}にアクを取り除いた。

「たっぷりのアラから出汁が取れるから、味付けは味噌と生姜だけでいいかな」

汁物を仕込んだので、次はメインの海鮮丼だ。

ハーフドワーフのミヤに作ってもらった刺身包丁の切れ味がすばらしい。

ブリやビッグシェルの貝柱、サーモン、エビ、ウニ、カニを食べやすいよう、お刺身にする。

「この大葉っぱいハーブと西洋ワサビも添えないとねー」

どちらも食材ダンジョン内で採取しておいた薬味である。香りも味も抜群だ。

酢飯もちょうど良い具合に冷えていたので、さっそく海の幸を大皿に盛り付ける。陶器製の器を取り出して、それぞれ好きな具材を自分で盛れるよう、ビュッフェスタイルに。

煮詰まったアラを鍋から取り除き、火を止めてから味噌とすりおろした生姜を溶かしたところで、エドが戻ってきた。

「獲^とってきたぞ、ナギ」

「ありがとう！ こっちもちょうどご飯ができたところだよ」

手渡された食材を【無限収納EX】に収納して、二人でテーブルを囲んだ。

ほっとするような、温かな匂いにエドが琥珀色の瞳を細めている。

汁椀にたっぷりとアラを入れて、味噌汁を注ぐ。最後に刻んだネギを散らすと完成だ。

丼鉢サイズのマイ陶器にエドはさっそく酢飯と具材を盛っている。

「ナギ、ナギ。俺の海鮮丼だ」

「わあ……いっぱい盛ったねえ……」

素直に感心してしまうほどの、メガ盛りだった。酢飯も結構盛っていたはずだが、刺身が絶妙なバランスを保って、天高くそびえ立っている。

「ナギのも盛ってやろうか？」

「気持ちだけもらっておくね。じゃあ、さっそく食べちゃおう」

普通盛りでおかわり派なナギは、さらりとエドの提案をスルーする。メガ盛り丼はわくわくするが、食べるにのびのびが難点だ。それにあれだけ具材を盛れば、酢飯に辿り着くのが大変そう。

（せっかくの酢飯だもの。じっくり美味^{おい}しいお魚と味わいたいじゃない？）

これまでずっと、酢飯にビネガーを使っていたのだ。白ワインから作られたビネガーはドレッシングに使うと美味しいが、残念ながら、お米との相性は微妙。

（食材ダンジョンで入手したのは米酢だもん。お米と合わないはずがないよね？）

海の恵みに感謝しつつ、さっそく海鮮丼をばくり。最初に狙うのは、ブリの刺身だ。酢飯を包んで口に運ぶ。つんと鼻腔をくすぐる、懐かしいお酢の香りにうっとりした。口に含んで噛み締める。「んんっ、美味しい……。お酢がまろやかで、お刺身との相性が抜群ね！」

ナギの実家のレシピは砂糖が多めなので、酢飯に慣れていなくても食べやすいはず。

横目で眺めたエドは無心で丼を掻^かきこんでいた。ナギの視線に気付いたのか、エドは丼をテーブルに置くと、口の中の物を大急ぎで咀嚼する。「旨^{うま}いぞ」と感想を伝えてくれた。

「うん、見ているだけで分かったわ。気持ちの良い食べっぷりだもの」

くすくすと笑いながら、ナギも同じように陶器の器を持ち上げて、海鮮丼を頬張った。

脂の乗ったサーモンは舌の上で踊るように消えた。ビッグシエルの貝柱とエビはほんのり甘い。ビッグクラブの刺身とウニも蕩けそうなほど美味しかった。

もちろん、汁物も忘れていない。しっかりと出汁の効いたアラ汁はお腹の底から温まる。

あれだけ用意しておいた酢飯とお刺身を綺麗に平らげてしまった。

途中で仔狼に変化して、アキラもたつぷりと懐かしい味を堪能して満足そうにしている。

『海鮮丼おいしかったです、センパイ！ アラ汁も懐かしかったー。今後の豊かな食生活のために』

も、お酢と味噌は大量に確保しておきたいですねっ』

ぽっこりお腹を見せつけるように仰向けで転がる黒ボメラニアンもどき。吸い寄せられるように近寄って、無心で撫でてしまう。気持ち良さそうに金色の瞳を細める姿がとても愛らしい。

『センプイ、次は何の食材を狙っているんです?』

「色々欲しいものはあるけど、まずはサーモンかな。あと、イクラ」

『サーモンにイクラ! いいですね、協力しますよ』

「エドに頼む予定だったけど、じゃあアキラにお願いしようかな」

向かう先は、二十階層。

このフィールドは少し変わっている。海ダンジョンなのに、川がメインなエリアなのだ。

転移する場所は決まっていらない。パーティごとには離れた位置に送られるようで、見知らぬ冒険者たちとがち合うことは、まずなかった。

仔狼を抱き締めたまま、転移扉に触れる。二十階層へ。

『岩場に転移したみたいです。足元に気を付けてくださいね』

「ん、分かった。アキラも気を付けてね」

『ふん。任せてください!』

ナギの腕の中からぴょんと飛び降りると、仔狼はすぐに本来の姿に変化した。エドの姿ではなく、巨大な黒狼の姿へ。見上げるほどに大きな黒狼に寄り添い、周囲を見渡してみる。

どうやら大小の岩が転がる川辺に飛ばされたようだ。

少し歩けば平原に出られるが、二人は微動だにしない。

爛々と輝く眼差しを、ひたと川の中に向ける。そこに求めるものがあるのだ。

パシヤン、と水音を立てて、それは川面を飛び跳ねた。ナギはぱつと顔を輝かせた。

「たくさんいるみたい」

『獲り放題ですね! 行ってきます!』

馬と変わらぬ大きさの黒狼はさっそく川へと突進していった。

水深はそこまで深くないようだ。狙う獲物は、川を埋め尽くしている。

迫力のある光景にナギは束の間、見惚れてしまった。

二十階層のメイン獲物はフィールドを占める川を遡上するサーモンだった。

鮭は生まれて数年ほどで、海から故郷の川に戻ってくる。川の流れに逆らって遡上し、そこで産卵するのだ。初めて二十階層に到着した時には、その勢いに圧倒された。

そして、その恵みに大いに感謝したものだ。

「どうしてダンジョン内に遡上するサーモンがいるのかは謎だけど……」

ちよつとだけ悩んだが、まあダンジョンだし、と納得した。

川に入ったアキラは嬉々としてサーモンを獲っていく。

器用に前脚ですくいあげ、ナギの足元へと放り投げてくれる。まるでクマだ。

川から弾かれた際に失神しているため、サーモンは無抵抗。

ナギはうきうきと地面に横たわるサーモンを拾い、【無限収納EX】に収納していった。

両腕でどうにか抱えられるくらいの大きさのサーモンは丸々と肥えていて、とても美味しそう。産卵のために川に戻ってきているため、腹の中にはぎっしりと卵が詰まっている。

「サーモンとイクラの海鮮親子丼が食べ放題ね」

その独り言をしつかり聞き取った黒狼が、さらに張り切ったのは言うまでもない。

たっぷり働いたので、お腹がぺこぺこだ。

目当ての魚介類を大量に確保した二人は少し早めの夕食をダンジョン内で食べて帰ることにした。新鮮な食材がたくさん手に入ったので、本日のメニューはシーフードカレーに決定。

「具材はイカとエビ。貝柱も入れちゃおうかな」

一口サイズに切り分けたイカやエビ、貝柱をバターで炒めていく。塩胡椒に白ワインを入れて蒸し焼きに。綺麗な焼き色がついたところで、皿に除けておき、根菜類をバターで炒める。

玉ねぎは特に念入りに飴色になるまで火を通し、コンソメスープとローリエを追加して煮込んでいった。シーフード類を加えてじっくりと煮込んでいく。

アクをすくい取り、透明なスープになったところで火を止めてカレー粉を投入。

スパイス類をアレンジして粉末状にしたカレー粉はナギ渾身の作だ。

味見をしつつ、カレー粉の量を調整する。

「んー。いい香り。もうすでに美味しそう！」

あとは弱火でくつくつと煮込むだけ。ご飯は炊いておいたので、さっそく実食。

「いただきますー！」

スプーンで慎重にすくったカレーをそつと口に含んだ。スパイシーな香りがたまらない。じつくりと味わいたいのに、あまりの美味しさにすぐに飲み込んでしまった。

旨味たっぷりのコンソメスープのコクと魚介類の出汁、華やかな味わいのスパイス。どれもが絶妙に絡み合っており、官能的にさえ思えるほどの出来栄だった。

「念願のシーフードカレー！ すっごく美味しい！ はあ、しあわせ……」

弾力のあるイカの食感は楽しいし、ぷりぷりのエビの甘みにうっとりする。

貝柱は噛み締めるとほろりとほどけていくが、旨味は随一だ。バターで念入りに炒めた玉ねぎは煮込んだことでスープに溶け込み、ほんのりと甘く、まろやかになっている。

「シーフードの旨味たっぷりのカレーとご飯の相性が最高ね」

「肉のカレーも良かったが、シーフードカレーも良いものだね。すこぶる旨い」

エドがたっぷり堪能した後で、アキラも舌鼓を打った。久しぶりのシーフードカレーに仔狼はとても感動していた。その小さな体のどこに、というほどの食べっぷりを披露する。

『センパイ、週一でカレーを食べることにしませんか』

「私もカレーは好きだけど、さすがに週に一度のカレーは飽きない？」

『飽きません！ エドも賛成しています！』

「うーん……スパイスがたくさん手に入ったら、ね？」

キラリと黄金色の瞳が光る。これは本気の眼差し。スパイスの確保が^{はかど}捗りそうだ。

夕食の片付けを済ませると、そのまま南の冒険者ギルドへ移動した。

食材以外の不要なアイテムはすべて買い取ってもらう。魔石、魔獣の素材や大粒の真珠、シーサハギンの小箱の中身だ。金貨二十枚以上の儲けになったので、笑いが止まらない。

「シーサハギンのお宝は稼ぐにはもってこいよね」

「ビッグシエルの真珠も査定担当者が大喜びしていたぞ」

貝柱が欲しかっただけなのだが、真珠の副産物ありがたい。

意外だったのは、帝国金貨が高く売れたことか。

この世界では金貨だけは他国発行の物であっても額面通りの金額で使えると聞いていたので、まさか二倍の値が付くとは思わなかった。

帝国金貨には皇帝の肖像が描かれているのだが、代替わりする度に鑄潰され、新たな皇帝の顔が刻まれるらしい。今回、シーサハギンの宝箱から出た帝国金貨は三代前の皇帝の肖像が描かれた物で蒐集家に人気の希少な品だったようだ。

うきうきと弾むような足取りで向かったのは、ハーフトワーフのミヤの工房。

数日前に依頼したキャンプツールが完成したらしい。

「アウトドアグッズ、欲しかったのよね。前世の私」

ちようどブームだったこともあり、気になってはいたのだ。ただ、前世の彼女はキャンプ未経験。ソロキャンプやベランダ飯を楽しむ度胸はなく、結局手に取ることはなかった。

「キャンプツールは冒険者や旅人に受けると思うのよね！」

工房を訪ねると、ミヤはさっそく完成品を披露してくれた。

「ナギの調理器具と同じく、ダンジョン産の軽金属で作ったよ」

持ち手を取り外し可能なクッカーは小鍋やフライパンとしても使える。リュックにぶら下げておけるシエラカップ、持ち運べるサイズのホットサンド用フライパンもあった。

「すごい！ ちゃんとお願ひした通りに作ってくれたんですね！」

クッカーはスタッキング型なので、重ねて収納できる。皿代わりに使えるので、荷物を減らすこともできる。木皿よりも軽金属の方が軽く、持ち運びしやすいのもいい。

「このシエラカップ？ 便利だね。火に掛けられるから、川の水を沸かして飲めるし、カップでスープも作れる。冒険者連中は川の水をそのまま飲むから、よく腹を壊すと聞いたことがあるよ」

「そうなんですよ。綺麗な湧き水は滅多に見つからないので、作ってもらいました」

生活魔法が使えるナギたちは水を浄化することができるし、水魔法で飲み水も出せる。だが、魔法が使えない者や収納スキル持ちでなければ、安全な水を持ち運ぶのは難しいのが現実だ。

「野営の際に温かい飲み物があれば、見張り番も辛くないとガーディも言っていた」

スキンヘッドの強面先輩冒険者、ガーディ。面倒見の良い銀級冒険者の彼と護衛任務が一緒になった時に、キャンプツールをミヤに依頼しようと思っていたのだ。

食は大事だ。栄養はもちろん、温かくて美味しい食事は大きなエネルギーになる。

干し肉や乾パンだけの食事が続く旅は味気がない。ナギが作ったシンプルなスープをうまいうま

いと大喜びで食べていた彼らに、もっとマトモな食生活を送ってほしかった。

「開発、ありがとうございました。さっそく明日からの野営に使ってみますね」

好評だったら、次はダッチオープンや持ち運びができるミニサイズのバーベキューコンロの作成をお願いしようと、こっそり考えるナギだった。

翌日、東の冒険者ギルドに向かうと、あらためて食材ダンジョンの調査に同行する旨の指名依頼を言い渡された。

そのままギルドマスターの執務室に招かれて、さっそく顔合わせとなった。

案内人はダンジョン発見者であるナギとエドの二人。

師匠であるラヴィルとミーシャは護衛役に名乗り出てくれたらしい。とても心強いのだが、どうやってギルドに捻じ込んだのだろう。

不思議に思っミィシャに尋ねたら、とても良い笑顔で「……内緒」と囁かれた。

うん、これは聞かない方がいいやつだ。エドと顔を見合わせて、そっと頷いておく。

ギルドマスターのベルクが軽く咳払いした。

「よし、全員揃ったな。手短に紹介する」

テーブルを挟んだ向かいに座る銀級冒険者パーティが、今回のダンジョン調査に協力してくれる四人組のようだ。男性二人と女性二人、二十代後半から三十歳くらいの年齢に見える。

「金級のラヴィルと元金級冒険者ミィシャが案内人の護衛担当。こっちの四人組パーティがダン

ジョンアタックチーム。銀級で、信頼できる連中だ」

ベルクが紹介をすると、年長の男性が片手を差し出してくる。

「よろしく。『黒銀』のリーダー、槍使いのルトガーだ。こっちの盾使いの大男がデクスター、弓

使いの彼女がキャス、大剣持ちの彼女がゾフィだ」

盾使いと大剣持ちの男女はクマ獣人だ。どちらも毛並みは漆黒で、寡黙な性格のよう。

リーダーのルトガーと弓使いのキャスは人族。ルトガーは短めの銀髪、キャスは青みがかった銀髪の持ち主だ。落着いた雰囲気があり、バランスの良さそうなパーティに見える。

「で、こっちがダンジョンを発見した銅級コンビのエドとナギ。まだ成人前だが、コイツらの弟子だけあって、優秀だ。案内人として同行するが、自衛はできる」

トラ獣人であるベルクに一瞥され、エドが大きく頷いた。ナギもこくこくと頭を振る。

「足を引っ張らないよう、頑張ります」

「ナギは俺が守るから平気だ」

「あら。貴方たちは私が守ってあげるから、安心なさいな」

くすりと笑いながら、手を振ったのはラヴィルだ。美しき白兎獣人のレイピア使い兼格闘家の冒険者。そして、エドの師匠でもある。

「ナギは私が守り抜きましょう。愛弟子ですから」

対抗するかのように名乗りを上げたのは、玲瓏たる美貌の主、エルフのミィシャだ。

とても心強い。魔道具と魔法で自衛するつもりだが、師匠二人やエドに比べると、突発的なハプ

ニングに弱い自覚はある。

「正直に言うのと、とても心強いです」

真顔で申告すると、ラヴィルに頭を撫でられた。笑みを孕んだ鮮やかな赤い瞳と目が合う。

「んふふっ。お礼は美味しいご飯で構わないわよ？」

「ラヴィー！ 貴女はまたそんなことを。ナギは私の愛弟子ですよ？ ちなみに、美味しいご飯も良いものですが、私は珍しいお菓子も好きです」

眉を寄せるミーシャだが、友人を窘めつつも、さりげなくリクエストしてくる。

「護衛の報酬、本気でそれでいいんですか」

ギルドマスターのベルクがため息交じりに割って入ってきた。

「あー、コホン。その件だが、前回の護衛任務の際にもナギの料理は評判が良かったようだな」

「リリアーナさんの護衛任務の件ですよ？ 簡単な野営料理しか出せませんでした……」

「充分だ。任務完了報告に來た連中が喜んでいただぞ？」

商会の護衛をしていたガーディが気を利かせてくれたのだろう。

「今回も皆の食事の面倒を見てほしい。もちろん食材費はギルドが持つ。調理をお願いするナギにも別途報酬を用意するつもりだ」

八人分の食事を用意するのは大変だが、食材費と報酬が貰えるのなら、悪い話ではない。

（エドと師匠たちのご飯はもともと作る予定だったし、四人分増えても大丈夫かな）

同行する彼らに干し肉や乾パンを齧^{かじ}らせるのは申し訳ない。

自分たちだけ美味しいご飯を平気で食べる鋼の神経もあいにく持ち合わせてはいなかった。

「下^{しも}拵^{しなせ}えなら、俺もできるぞ」

エドが立候補してくれ、師匠二人も笑顔で頷いた。

「食材が豊富なダンジョンなんでしょう？ なら、私が肉を獲ってきてあげる」

「ならば、私は採取を担当します。植物鑑定は得意なので、任せてください」

「狩りなら、うちの連中も得意だぞ？」

ルトガーも協力を申し出てくれたので、ナギは料理人の仕事を受けることにした。

「食材ダンジョンなので、肉や果物類は現地で入手できますよ。小麦粉やお米、あと根菜類や調味料は持参したいです」

「手配しておこう。リストにしてサブマスのフェローに提出してくれ」

「分かりました。……ちなみに予算は？」

「それもフェローに確認だ。二ヶ月分だから、それなりの量になりそうだな。……ああ、預かっていたドロップアイテムの査定も済んでいる。ついでに報酬も受け取ってけるといい」

詳細を確認して、打ち合わせは終わった。

出発は三日後。冒険者ギルドから四頭立ての馬車を出してもらえようだ。『黒銀』の三人は馬に乗り、周囲を護衛してくれるとのこと。馬車の馭者席にはキャスが座ってくれることになった。

「本来ならもう一台馬車を用意するところだが、『アイテムボックス』持ちがいるからな」

総勢八名の調査隊だ。普通なら荷馬車も必要だが、荷物はすべてナギが収納すれば不要になる。

「ルトガー、コイツらのスキルについては……」

「分かっている。誓約書にもサインはした。任務中に知り得た情報は誰にも漏らさない」

「おう、頼むぜ？ なにせ、コイツらはうちの秘蔵っ子だからな」

からからと豪快に笑うギルドマスター。誓約書の話など、ナギには初耳だったが、涼しい表情をしているミーシャが手を回してくれたのだろう。

「もちろん守秘義務はしっかり守るさ。……それにしても、まだ年若いのに優秀な冒険者だと不思議に思っていれば——まさかアンタたちの弟子だったとはな」

ルトガーが師匠たちをまぶしそうに見やる。

「戦闘狂ウサギの弟子なら、かなりの腕前だろう」

クマ獣人の盾使い、デクスターが重々しく頷いた。

隣に立つ、同じくクマ獣人の女性、ゾフィも羨望の眼差しをエドに向けている。

大きな黒クマが白ウサギに一目置いている様子から、ラヴィルの戦闘能力の高さが知れた。

「暴虐のエルフの愛弟子というのも驚きだな。これまで決して弟子を取らなかった、凄腕の魔法使いだぞ？ 収納スキルの容量も桁違いなようだし、同行できるのが楽しみだ」

「そうね。ミーシャさまの精霊魔法を間近で見られるチャンスだもの、私も楽しみだわ」

「戦闘狂の戦いを拝めるのも良い経験になる」

楽しそうに盛り上がる『黒銀』メンバーと食材ダンジョンで美味しい物が食べられるとこちらも上機嫌な師匠たち。

ちよつとだけ不安が残るが、調査のためにまたダンジョンに入れることは楽しみだ。

（たくさんスパイスがゲットできますように）

ギルドが貸し出してくれた四頭立ての立派な箱馬車の乗り心地は悪くない。

少なくとも、愛用のゴーレム馬車よりは快適だとナギは思う。座席に敷かれた物理耐性持ちの魔獣の毛皮効果なのか。いずれにせよ、下半身の痛みに悩まずに済むのは僥倖である。

ナギとエド、護衛役の師匠を合わせた四人が乗る馬車の馭者席に座っているのは、『黒銀』の弓使いキヤスだ。リーダーの槍使いルトガー、大楯使いのデクスター、大剣を背負ったゾフィの三人は馬車を囲むような位置で騎乗している。

ダンジョン都市を発つて、すでに二日。旅は順調だ。護衛任務に慣れた『黒銀』と師匠たちとの旅路は依頼人に気を遣う必要がない分、気分的にも楽だった。

先を急ぐため、荷物はすべてナギが【無限収納EX】に収納してある。

（おかげで身軽く動けるって喜んでもらえて良かった）

馬車の中で居眠りするのにも飽きて、ナギはこっそり目の前の麗人を眺めた。

（相変わらず、極上の美人）

冒険者装束を身に纏ったミーシャの姿に、ようやく見慣れた気がする。女性冒険者のための宿『妖

精の止まり木』を経営している彼女は、いつもゆったりとしたワンピースを着ていた。

そんな彼女が、今は動きやすいようパンツ姿でいるのだ。長袖のシャツでしっかりと肌を隠し、コルセットに似た形の女性用の革製の鎧レザーアーマーを装着している。

フード付きの薄手のローブは草木染めを施しているような、落ち着いた色。肩から背に長弓を引っ掛けており、白銀色の美しい髪も邪魔にならないように編み込んでいる。

いつもの彼女らしい、おっとりとした清楚な雰囲気は皆無。

凜とした、美しいエルフの戦士がそこにいた。

「そろそろ馬を休ませましょう、ルトガー」

キヤスが並走するライダーに声を掛けて、街道沿いの休憩場に馬を誘導する。身軽になった分、スピードが上がり、二時間ごとにこまめに休憩を取るようになっていたのだ。乗馬も体力を使う。

馬の世話をする三人に、ナギはシェラカップを手渡した。中身は冷えたレモネードだ。

「ありがとう。これは、果実水？」

「レモン果汁を水で割って、蜂蜜を混ぜた飲み物です。疲れが取れますよ」

師匠を筆頭に女性陣には好評だったが、ルトガーたちも一息で飲み干していた。特に黒クマ獣人のデクスターは気に入ってくれたようで空になったカップをそつと差し出してくる。

「おかわりは貰えるのだろうか」

「あ、はい！ どうぞ」

大事そうに大きな手でカップを包み込むように持って、ちびちびと舐めている。甘党なのだろう

か。ギルド職員のクマ獣人ガルゴも蜂蜜には目がなかったことを思い出し、ほっこりする。

レモネードだけでは物足りなさそうだったので、パウンドケーキも出すことにした。

ドライフルーツに加工した無花果いちじくとバターをたっぷり使ったパウンドケーキは、あつという間に皆のお腹の中に消えてしまった。瞬殺である。欠片ひとつ残っていない。砂糖の代わりに食材ダンジョンで採取した極上の蜂蜜を使ったので、なおさら美味しかったのだと思われる。

「野営食だけでなく、お菓子まで作れるなんて。ナギは本当に多才ね」

「もう一流の料理人だろ、これ。こんなに美味しい甘味は初めて食ったぞ」

キヤスとルトガーがしみじみと言う。あまり凝ったものは提供していないつもりだが、温かくて美味しい料理が食べられるなんて、と食事の度に感激されている。

身ひとつでの移動はエイダン商会の護衛任務と比べて、倍の速度で進んでいた。

（荷が軽くなったのと、やつぱり【回復魔法】のおかげかな？）

休憩の度に、ナギとミーシャがせつせと馬たちに【回復魔法】を掛けてやっているのだ。

【回復魔法】は【治癒魔法】より効果が低いと言われている、初期魔法。怪我や病気を治すことはできないが、疲労を軽減することが可能だった。地味だと思われがちだが、便利な魔法なのだ。

日中は街道を駆け抜け、夜は早めに休憩場で野営することに。

パーティーごとに分かれて、それぞれが魔道テントで寝泊まりしている。『黒銀』は四人用の立派なテントを慣れた手付きで組み立てた。ナギも自前の魔道テントを設置する。

ちなみにラヴィルは馬車の座席をフラットにして、毛布をかぶって眠るそうだ。

ミーシャは冒険者時代にダンジョンの下層で入手した魔道 TENT を愛用しているらしい。どんな TENT なのか気になって、ナギは中を見せてもらったことがある。

年代物らしき皮製の TENT は四畳半ほどの広さがあった。まるで秘密基地のような佇まいの TENT に胸を高鳴らせたことを覚えている。コットや寝袋の代わりに中央に吊るされたハンモック。

木箱をテーブル代わりに使い、魔道ランタンや本、羽根ペンが無造作に置かれていた。

はみ出した衣服のせいで蓋が開いたトランク。乾燥された薬草や何かの素材がそこかしこに散らばっており、雑然としていたが、不思議と居心地が良かった。

TENT 素材の魔獣の皮に空間拡張機能が付与されており、中の荷物も一緒に収納しているようだ。

コットや寝袋よりもハンモックに揺られながら眠るのが心地良いのだとか。

夏は涼しいし、湿気や虫に悩まされることもないので、意外と快適なのかもしれない。

(まあ、私は愛用のお姫さまベッドと最高の抱き心地の黒ボメ抱き枕があるから)

表立って自慢できないので、こっそり心の中だけでドヤ顔を披露しておいた。

本日の夕食はミネストローネとホットサンド。トマトに玉ねぎとニンジン、キャベツにジャガイモ、セロリとガーリックをたっぷり投入したコンソメ風味のミネストローネは自慢の一品。

野菜嫌いの師匠二人が絶望しないように、お肉も大量に入れてある。

「今回はコッコ鳥のモモ肉入りです！ 食べやすいように野菜はやわらかく煮込んでいますから、ちゃんと残さず食べてくださいね？」

「お肉だけでいいのにい」

微妙そうな表情のミーシャと唇を尖らすラヴィルにエドがスプーンを手渡す。

「師匠、このスープ旨いぞ？」

「……貴方がそう言うのなら。……ん、もぐ……美味しい」

スプーンですくったスープを口にするなり、ミーシャは目を見開いた。

「ほんと？ セロリの匂いにするのに、ほんとに美味しいの？」

「深みのある味のスープで、とても美味しいです」

うっとりとした瞳を細めるミーシャを眺めて、ラヴィルはおそろのおそろのスープに口をつける。

「ほんとだ。美味しい……お肉がほろほろだわあ……」

「皆さんもどうぞ。たっぷり用意したので、おかわりも遠慮なく」

皆がミネストローネに舌鼓を打っている間に、ナギは主食を用意する。ミヤに作ってもらった自慢のキャンプツールのひとつ、ホットサンド用フライパンが大活躍だ。

エド作の食パンを使い、ハムと卵のホットサンドを人数分焼いていく。

「このスープ、本当に旨いな」

「まさか野営でこんなに贅沢なスープが味わえるなんて思わなかったわ」

ルトガーとキャスがうっとりとしたミネストローネを堪能している隣では、黒クマ獣人のデクスターとゾフィが黙々とおかわりを繰り返している。

二人は夫婦だそうで、こういう時のふとした仕草がそっくりだ。

「旨い」

「いくらでも食べられる」

物凄い勢いで平らげていく様子に、師匠二人とエドも慌てておかわりに参戦する。

「ホットサンドが焼けましたよ。熱いので気を付けて食べてくださいね」

「俺が配ろう。ナギは食事を」

「ん、ありがとエド。いただきます」

街中依頼でレストラン勤務のあるエドの給仕は手慣れたもの。

毎日リクエストされるほど、ホットサンドが好評だったのは言うまでもない。

翌日。馭者席のキャスが手綱を握りつつも、朝食の余韻に浸っている。

「今朝のスープもとっても美味しかったわ」

「ナギのポトフは絶品です」

「とろとろに溶けた玉ねぎって、あんなに甘くなるのね。知らなかったわあ。よく煮込まれたポア肉もやわらかくて美味しかった……」

ミーシャとラヴィルもうつとりとポトフの味を反芻している。

「サンドイッチも絶品でしたね。昨夜のホットサンドがいちばんだと思っていたけど、まだあればどの隠し玉があったとは。油断ができません。ふわふわのパン、また食べたいわ」

絶賛してくれているのは、頬を染めたキャス。マヨネーズで和えたゆで卵のフィリングとレタス、

生ハムを具にしたシンプルなサンドイッチだったが、よほど心に残ったのか。

「今回の特別任務、受けて正解だわ。一カ月のダンジョン調査も、ナギの料理とエドのパンがあれば全力で挑めそうよ」

「そうね。この二人が揃えば三食とオヤツ、どれも豪勢になるもの」

「師匠、ダンジョンでもオヤツをねだる気か」

「なんならオヤツは十時と三時、あと夜食を追加してくれる構いませんよ？」

「ミーシャさんまで……」

褒められて悪い気はしないが、さすがにそれは負担が大きい。

「うーん……私の欲しい食材をダンジョンで採ってきてくれるなら、いいですよ？」

「[[[-]]」

なぜか、エドまでハツとした表情で、ナギを凝視してくる。

馬車の外で併走していた馬上の三人も真剣な表情だ。ナギは慌てて馭者席に身を乗り出した。

「いや、危ないのです！ 全員、前を見てください！ 特にキャスさん！」

食材ダンジョンの美味しいものを効率よく集めるためには、同行した皆の胃袋を掴む作戦が有効だと気付いたナギはせっせと餌付けに励んだ。

ダンジョンで入手した食材や調味料を使った食事を積極的に提供し、醤油や味噌の味に慣れさせたのである。甘辛いタレに漬け込んで炭火で焼いたシンプルな串焼き肉に、一口で陥落していた。

「ふっふっふ。とうとう、これを使う日がきたのね」

ニヤリと邪悪に微笑みながら、ナギが取り出したのは、とっておきの串焼き肉。タレでも塩でもなく、希少なスパイスを使ったオーク肉だ。自家製のカレーパウダーで味付けしたそれを、じっくりと炭火で炙っていく。見慣れない色に皆がざわりと動揺する。

「あれは何……？ すごい色ね」

「スパイスの香りがする、贅沢な料理です。あんなに大量に使うとは、薬効が期待できますね」

師匠たちはエドの様子から、これは美味しいモノと当たりをつけたらしい。いそいそと皿を手に入ドの後ろに立つ。次に並んだのは黒クマ夫婦だ。

「この匂い。絶対に美味しいやつ」

「んむ。ヨダレが止まらん」

獣人の鼻をほどよく刺激したようで、彼らも期待に満ちた眼差しを向けている。

ルトガーとキャスもおそろおそろ後に続いた。

「ナギが作る飯にハズレはなかったからな」

「不思議と食欲を刺激する香りよね」

焼き上がったオークの肉串を順番に手渡ししていく。カレーパウダーは量が少ないので、一人一本ずつ。一口サイズのごろっとした肉を炙り焼きにしたので、食べ応えはあるはずだ。

「どうぞ召し上がれ。……んっ、熱いけど、おいしー！」

真っ先にかじりついたのは、カレーの味を知るナギとエドの二人だ。たっぷりの肉汁とびりりと

したスパイスの刺激が脳を直撃する。

「辛いわ！ でも、不思議と美味しい。やるじゃない、ナギ」

「スパイスの他に薬草も使っていますね。まさか、あれが調味料になるなんて」

さすが、エルフ。ミーシャには使っているスパイスがバレたようだ。だが、今のところは知的好奇心よりも食欲を優先したようで、黙々と串焼き肉を食べている。

「なんだ、これ。初めて食べる味だが、すこぶる旨いな」

片手で口元を覆って感動するルトガー。キャスは涙目になりつつも、夢中で食べている。

「喉がひりつくけど、止まらない……！」

黒クマ夫婦はゆっくり味わう余裕もなく、あつという間に完食していた。

ちゃんと噛んで食べたのか、心配になる勢いだ。

食べ終わった串を眺め、物憂げな眼差しをナギに向けてくる。

「おかわりは——」

「残念ですが、ありません。これは貴重なスパイスを使っているの、一人一本だけです」

「そんな……」

ショックを受ける歴々を見渡して、ナギはにこりと笑う。

「そんな皆さんに朗報です。さきほどのピリ辛調味料の素であるスパイスは、ハイペリオン・ダンジョンでゲットできます」

「なに！ 本当か！」

「本当です。フロアボスを倒せば、ドロップします。今回は串焼き肉に使いましたが、カレーパウダーの可能性は無限大です。もっと美味しい料理を作れますよ？」

ごくろ、と喉が鳴る音が響く。

す、とミーシャが口元をハンカチで拭いながら優雅に片手を上げた。

「学術的に興味があります。そのスパイスは私が手に入れましょう」

「ズルイわ、ミーシャ！ 私も美味しいスパイス料理が食べたいっ！」

「いやいや、アンタ達はナギとエドの護衛だろ？」

「そうよ。ここは私たち『黒銀』の出番ね」

「うむ、任せろ。フロアボスだな」

「全部叩き潰す」

全員のやる気を爆上げさせたナギは、大成功！ と無邪気に笑う。

「ナギ……煽り過ぎだ……」

「でも、これでカレーがたくさん食べられるようになるよ？ エドもタンドリーチキンを食べたいでしょう？」

カレーピラフも作りたいし、カレーパンもいいなー」

ぴくりと三角のお耳が揺れる。カレーパン。前世の記憶が疼いたのだろうか。

「……案内役がボスを狩っても問題はないよな、ナギ？」

たくさんスパイス類が手に入りそうな予感にナギは笑みを深めた。

第二章 いざ、食材ダンジョンへ

大森林に近い集落で、馬と馬車を預けて目的地に向かった。

ダンジョンはネコ科獣人が暮らす、この集落から徒歩一時間の場所にある。

「第一発見者特典で得た【自動地図化】スキルで、どこにあるのか、何となく分かるのよね」

「ダンジョン内の構造も分かるし、魔獣や魔物の位置や数も把握できるから便利だ」

「羨ましすぎる能力だな。案内役にぴったりだ」

「今から向かえば、暗くなる前にダンジョンに到着できるわね」

「集落に宿はないようだし、セーフティエリアで野営しましょう」

「賛成。ダンジョン内のほうが安全よ」

頼れる大人ばかりなので、安心して彼らの指示に従う。魔獣や魔物はセーフティエリアに侵入できないので、大森林の傍にある集落で野営するより安全なのだ。

「俺が先導する」

エドが先頭を歩き、黒クマ夫妻が後に続く。その後をミーシャ、ラヴィルに護衛されたナギ。弓士のキヤスと槍使いのルトガーが最後尾についてくれた。

出くわす魔獣はすべて、エドや黒クマ夫婦が見事に仕留めてくれる。

移動中はよほどの獲物でないかぎりは捨て置kraしいが、ナギはせっせと回収した。

「大森林の魔獣肉は美味しいもの。捨てるなんて、もったいない！」

「普段は荷物になるから止めるんだが、ナギは収納スキル持ちだからなあ」

リーダーのルトガーには呆れられたが、美味しいお肉だと聞いた皆の目の色が変わっている。

「倒すのは私たちに任せて。回収だけお願いするわね、ナギ」

エドだけでなく、ラヴィルや黒クマ夫婦も張り切って倒してくれた。

「今夜のディナーは豪華になりそうだな」

大森林産の魔獣を十二頭ほど仕留めた頃、ようやくダンジョンに到着した。

「これがダンジョンの入口か。本当に大樹が転移扉になっているとは……」

ハイペリオンの樹の根元にある転移扉が、食材ダンジョンへの入り口だ。

見上げるほどの大きさの木に、皆が圧倒されている。

「ギルドに報告するための記録を取ります」

そう言ってミーシャが取り出したのは、上級ダンジョンでドロップしたという魔道具。人や景色をそのまま写し取ることができるのだという。カメラかと思いきや、見た目は手鏡だった。

記録したい対象に鏡面を向け、魔力を込めると映像を残せるらしい。

こっそり鑑定してみたが、静止画しか撮影できないようだ。残念。

「記録できました」

「おう。じゃあ皆、行くぞ」

はぐれないように全員でくっついて、ルトガーが入口にある転移扉に触れる。

独特の浮遊感に耐えて、そっと目蓋を押し上げると、そこは久しぶりのハイペリオン・ダンジョンの一階層だった。

スライムしか出没しない洞窟。視界の端に【自動地図化】の透明なボードが浮かび上がる。

点滅する赤い点が魔獣。タップしてみたが、やはりスライムだった。

「宝箱のマークは見えないな」

「初回特典だったんだと思う。罫の有無まで地図で分かるのは、ありがたいよね」

案内役のエドとのんびり会話しながら、先へ進む。最弱のスライムは軽く蹴飛ばすだけでドロップアイテムに変化した。魔石とスライムゼリー。もちろん、すべて収納する。

「生きたスライムからしか採れないはずのゼリーがドロップするの？」

キャスは驚いているようだが、ここは食材ダンジョン。食べられる素材なら、ドロップする。

「野営をするなら、洞窟よりも草原がいいだろう」

即席パーティのリーダーとなったルトガーの判断で、二階層を拠点とすることになった。

スライムしか出没しない一階層を最短で制覇して、二階層に到着した。

空はすでに朱紫色に染まっており、気の早い一福星が煌めいている。

転移扉を中心にして、半径十メートル四方がセーフティエリアだ。

さっそくテントの準備をしようと動き出す皆をよそに、ナギはそっとエドの袖を引いた。

「……エド」

「ナギが決めたことなら、反対しない。この連中なら信用できると、思う」
ここに来るまでの道中で、こっそりと相談していたのだ。

今回の調査任務は長丁場になる。一ヶ月以上、場合によっては二ヶ月ほどダンジョンに滞在することになるかもしれないと、フェローから聞いていた。

物資には困らないが、さすがにそれだけの長期間をテントで寝泊まりするのは辛い。

快適な暮らしを切望しているナギにとっては体力的なことはもちろん、精神的にも厳しい環境になるのは必至。なので、二人はダンジョン野営の初日に秘密をひとつ打ち明けることにした。

「あの、実は私たち、野営にとっても便利な『家』を収納しているんです」

思い切って、ナギは口火を切った。

焚き火用の枝を拾いに行こうとしたルトガーが足を止めた。喉を潤していたミーシャが、ふと顔を上げる。キヤスが不思議そうに首を傾げた。

「家？ ああ、大型の魔道テントのことかしら。たしかにアレがあれば、拠点に使えて便利ね」

「いえ、魔道テントではなくて……説明するよりも、見た方が早いかな」

セーフティエリアの中央に立ち、ナギは【無限収納EX】からそれを取り出した。

草原の中に突如として現れたコテージに『黒銀』のメンバーはあぐりと大口を開ける。

「はっ!? え、何だコレ……？ 待て、野営に便利な家って、まさか」

「コテージです。寝室は一つだけですけど、リビングが広いので全員で寝泊まりできますよ？」

丸太で組み上げられたコテージは、ナギとエドが共同で購入した土地に建てられていた物だ。

引退した老魔術師が住んでいた木造の平屋建て。元の住人は人嫌いの偏屈者だったが、魔術師としての腕は確かなようで、コテージには【状態保存】の術式が組み込まれていた。

寝室とキッチン、リビングには暖炉付き。あとはトイレとバスルームがあるだけの、小さな家だ。二人で暮らすには狭いが、野営の際の拠点として使うなら充分な『家』だと思う。

母が使っていた屋敷があるため、コテージは【無限収納EX】に収納してあった。

これまでも野営の度に便利に使っていたが、人目のない場所——特に、まだ他の冒険者が一人もいないダンジョン内では快適な拠点として大活躍するのは間違いない。

「テント泊も嫌いじゃないんですが、四方をしつかり壁に囲まれた部屋のほうが落ち着いて熟睡できるかなと思って……ダメですか？」

『黒銀』の四人が呆然とコテージを見上げる中、師匠二人は悠然としている。いや、驚いてはいるのだろうが、どちらかと言えば呆れているようだなとエドはこっそり考えていた。

「サブマスから規格外の収納スキルだとは聞いていたけど、ここまでとはねー。さすがに驚いたわ」
「ナギの魔力量なら、このくらいは造作もないでしょうね」

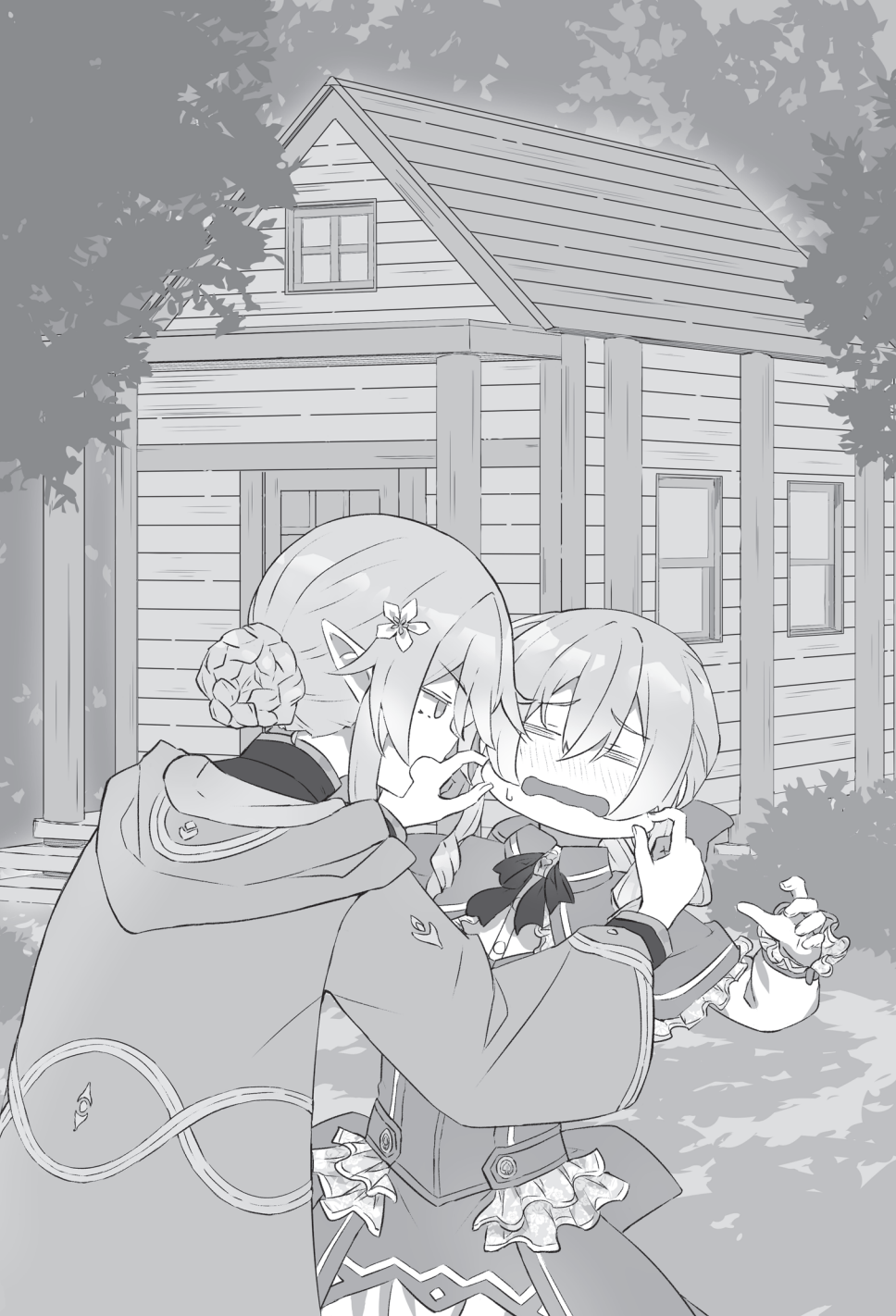
くすりと笑うラヴィル。ミーシャは何でもないことのように肩を竦めてみせている。

「とはいえ、まさか家ごと持ち歩くとはい思いませんでした。……その手があつたのか、と」

「ミーシャさんなら、このくらい収納できますよね？ お家の持ち運び、便利ですよ！」

「ええ、ええ。便利でしょうね、とても」

ほっそりとした手がナギの頬を優しく撫で——むにゅっと摘み上げる。



「いひやいれふ、みーひゃひゃん……」

「あなたの特別なスキルは秘密にしておきなさいと、言いましたよね？」

「ごめんなひゃい……。でも、一ヶ月以上ダンジョンにこもるなら、快適に暮らしたくて」

「……まあ、もうバラしてしまったので仕方ないですが。今後は気を付けるのですよ？」

「ふあい」

ようやく、ほっぺが解放された。

ほんのり赤く染まった頬を撫でながら、ナギはあらためて皆に説明する。

「快適に休めるお家があった方がダンジョン探索にも集中できると思いました。ごめんなさい」

「それは、たしかに助かるが……。その、なんだ。この建物は君たちが住んでいる家なのか」

「いえ、普段は別の家に住んでいます。これは、買った土地におまけで付いていた建物ですね」

「買った土地……？」

ルトガーとキャスが唖然としている。黒クマ夫婦は興味深そうにコテージを観察していた。

「ナギ、見てもらった方が早いんじゃないか」

「あ、そうだね。皆で泊まるなら、見てもらった方がいいよね。説明しなきゃ」

「待て。お誘いはありがたいが、さすがにこの大きさに八人が泊まるのは無理があるだろう。俺たちは遠慮するから、そっちの四人で泊まれればいい」

遠慮するルトガーは良い人だと、ナギは好感を抱いた。笑顔でコテージのドアを開ける。

「大丈夫ですよ。中とはとても広いので」

「えっ、どういうこと？」

外から見たコテージは一人暮らし用の小さな家^{タイニーハウス}。だが、一歩中に踏み込むと、その広さに皆が驚いている。ナギは周囲の反応を目にして、満足そうに頷いた。

（旅に出る前にコテージの改装を頑張った良かった！）

部屋数を増やすことはできないが、スキルで空間を拡張させれば、広々とした家に変身だ。

リビングの本棚とソファは撤去して、ダイニングには四人用のテーブルを二つ並べてある。空いたスペースには、シングルサイズのベッドを六台並べて置いたのだ。

寝室も十二畳サイズに拡張した。夜はいつもエドに仔狼の姿に変化してもらって、アキラと一緒に眠っているが、さすがに今回は諦めることになりそうだ。【獣化】スキルは秘密にしている。ベッドはそれぞれ壁際に一台ずつ設置した。寂しいが、仕方ない。

「なあ、ナギ。なんで、外観と中の広さがこんなに違うんだ……？」

「それはこのコテージの元の持ち主が凄腕の魔術師だったからですね！ 【状態保存】だけでなく、

【空間拡張】の術も付与されていたので、中がとっても広くなっているんですよ、ルトガーさん」
とても良い笑顔でナギはしれっと嘘を吐いた。

ルトガーは何とも複雑そうな表情で部屋の中を見渡している。キャスは並べられたベッドを目にして、嬉しそう。せまいテントで眠るより、快適なことは保証します。

「そんな良物件があるものなのか……？」

「皆の外、森と隣接する土地だから、売れ残っていた。幸運だった」

「なるほど……？ たしかに、それだと冒険者以外には危険な立地だな」

大真面目な表情でエドが援護してくれる。それで納得してくれたらしく、ルトガーは軽く顎を引くと、広々としたリビングを羨ましそうに眺め始めた。

ラヴィルはさっそく窓際のベッドに寝転がって、くふふと上機嫌に笑っている。

ひととおりコテージの中を案内すると、ミーシャは「良い家です」と褒めてくれた。

翡翠色の瞳を細めて意味深に微笑む表情から、この【空間拡張】を施したのがナギであることに気付いているのだろう。とりあえず、今回はほっぺが無事であったことに安堵した。

「これだけの広さがあれば、八人でも余裕で泊まります！」

「あー……ありがたい話だが、俺とデクスターは外のテントで寝るよ」

「うむ。俺たちは外で平気だ」

「その代わり、キャスとゾフィを泊めてやってくれ」

大人の男性である二人には遠慮してしまった。風呂とトイレだけ貸してくれば充分だと、爽やかに断られる。紳士だ。せめて食事はコテージで皆と一緒に済ませることをお願いしておいた。用意しておいたベッドはせっかくなので、彼らが使うテントに運んでおく。

元実家^{元家}の辺境伯爵から持ち出した、シングルベッドが大活躍だ。

四人用テントを二人で使うので、スペースには余裕がある。大柄な二人には少し狭いかもしれないが、毛布にくるまってごろ寝するよりは快適に眠れるはずだった。

せっかくなので、夕食の準備中、交代でお風呂に入ってもらおう。

道中は【生活魔法】で身綺麗にしてもらっていたが、温かいお湯に浸^つければ、疲れも洗い流せる。
「夕食は皆が狩ってくれたフォレストボアを使うことにするね」

解体は【無限収納EX】内でのスキルで済ませてあるので、大きな枝肉を取り出した。

「何を作ろうかな。エドは何が食べたい？」

「生姜焼きが食べたい」

「いいわね。じゃあ、メインは生姜焼きで、スープはボア汁にしよう」

食材ダンジョンで手に入れた料理酒とみりんがあるので、白ワインで誤魔化していた頃よりも洗練された味の生姜焼きを作ることができる。

ナギは張り切って調理を開始した。

お風呂上がりの皆が揃ったところで、夕食だ。

しっかりと味が染^しみ込んだフォレストボア肉の生姜焼きと山盛りにしておいたバターロールはあつという間に皿から駆逐されていった。

「ジンジャーの香りがする、このソースが絶品ね。ボア肉のスープもほっとする味だわ」

「私はこのオレンジのデザートが気に入ったわ！ 中がゼリーで驚いたけど」

オレンジのヘタがある部分をカットして、中身をエドにくり抜いてもらったのだ。果肉は丁寧にすり潰してスライムゼリーと蜂蜜で煮込んだものを冷やして固めてある。

「オレンジの皮をゼリーの器にしたのですね。見栄えもよくて、美味しいです」

男性陣はフォレストボアの生姜焼きが、女性陣はデザートがお気に召したようだ。

コテージではキッチンが使えるため、野営よりも凝った料理を提供することができる。

その点だけでも、皆はコテージが使えることを素直に喜んでくれた。

お風呂に入って、ふかふかのベッドで英気を養った翌日。

いよいよ本日から、ハイペリオン・ダンジョンの調査任務が始まる。

所有者特権で寝室を使わせてもらったおかげで、ぐっすり熟睡できたナギは張り切ってキッチンに向かった。

「今日の朝食はフレンチトースト！」

昨夜の内に玉子と牛乳、蜂蜜とバニラオイルを混ぜた特製^{アレ}の卵液^ユに食パンを浸して、魔道冷蔵庫で冷やしてある。熱したフライパンにバターを落として焼くだけの状態なので、簡単だ。

両面に綺麗な焼き色がついたら、平皿に盛り付ける。トッピングはお手伝いを買って出てくれたエドに任せた。早朝からルトガーとデクスターに鍛錬の相手をしてもらえたようで、機嫌がいい。

「蜂蜜をたっぷり掛けてもいいか」

「もちろん！ 粉糖を散らすのもいいかも。とっておきのバニラアイスも添えちゃう？」

キラキラの瞳が何よりも雄弁で、ナギは小さく笑った。

「おはよう、ナギ。手伝えることはあるかしら」

「あ、おはようございます、キャスさん。お皿を出してもらってもいいですか」

隙なく身支度を整えたキャスは朝風呂を堪能したようで、石鹸のいい香りがする。

「スूपボウルとサラダボウル、カトラリーを用意するわね」

作り付けの食器棚には、人数分の皿やカトラリーを収納してある。

「家ごと持ち歩けると、こんなに快適に過ごせるのね。ここがダンジョンの中だなんて、忘れてしまえそう」

「ふふ、便利でしょう？　そういえば、昨夜はよく眠れましたか」

人数分の目玉焼きとベーコンを焼きながら尋ねてみると、キャスはもちろん、と笑みを深めた。

「久々のベッドが気持ち良すぎて熟睡しちゃったわ。清潔なシーツも快適だったし、何よりお風呂に入れるのが最高！」

「お風呂は大事ですから。浄化魔法で汚れは落としても、疲れは取れません」

「実感したわ。七日間も馬車の上だと身体が固まってしまうもの。翌日の目覚めも全然違うわね」

テーブルに全員分の朝食を用意したところで、師匠たちがキッチンにやってきた。

「はよ……いいにおい……」

「おはようございます、ラヴィさん。寝癖がすごいですよ？」

「とても魅惑的な香りがしますね」

「おはようございます、ミーシャさん。フレンチトースト、お好きでしたよね？　特製の卵液に漬

けたパンをバターで焼いたやつです」

師匠二人にまとわりつかれると邪魔なので、テーブルへ誘導して席に座ってもらう。

視線を向けると、エドが心得た、と頷く。魔道冷蔵庫からオレンジジュースの瓶を取り出すと、コップに注いで二人に手渡してくれた。もちろん得意の氷魔法で作った氷入り。

「目覚めの一杯とは気が利いているわね。さすが我が弟子」

「冷たくて美味しいです。ありがとう」

くびくびと幸せそうにジュースを飲む二人。そこへ、テント組の二人が合流する。

「朝から豪勢だな」

「初日ですからね。張り切りました！」

とはいえ、そこまで手を掛けていない。バニラアイス添えフレンチトーストにベーコンエッグ。作り置きのパンプキンスープと野菜サラダ。デザートはカゴに盛った果物をご自由にスタイルだ。蜂蜜と卵、バニラと果物は食材ダンジョンで採取した物を使っているので、シンプルなメニューでも味は絶品。自慢の朝食だ。

ナイフで切り分けたフレンチトーストを一口食べて、キャスは目を見開いた。

「これ、本当にパン？　信じられないくらいにやわらかいし、ジュワッと甘い味が最高ね！」

キャスの乙女心にフレンチトーストは響いたようだ。粉糖で雪化粧をほどこし、ダンジョン産の蜂蜜をたっぷりとまぶしてある。ミントの葉をのせたバニラアイスと一緒に食べると絶品だ。

見た目も愛らしく、味も抜群に仕上がっている。

「また腕を上げたわね、弟子。パンも美味しいけど、このアイス！」

「師匠、痛い」

興奮したラヴィルにばしばしと背を叩かれて、エドは顔を顰^{しか}めている。

「薬効ばかり気にしていましたが、バニラは食材としても、とても優秀なのですね」

「そうなんです！ アイスはもちろん、プリンやクッキーとも相性がいい、素敵なスパイスなんですよ。このダンジョンでも上質なバニラが手に入るから、たくさん持って帰らないと」

キラリ、と翡翠色の瞳が輝いた。

夢中で朝食を貪^{むさ}り食べていた面々も手を止め、静かにこちらを見つめてくる。

「もしかして、この蜂蜜もここで手に入るのかしら？」

「はい！ 蜂蜜もメープルシロップもドロップアイテムです！ あと、このフルーツもここで採取したやつですね。東のダンジョンで手に入るものより、甘くて美味しいのが特徴です」

「この目玉焼きの卵とベーコンもここで手に入れた食材だ」

エドがはむりと半熟目玉焼きに齧^かり付きながら、次の爆弾を投入する。テーブルに並べてるのは、通常のコココ鳥の卵の卵の大きさの二倍はある、特製目玉焼きだ。

シンブルに塩胡椒だけで焼いたのだが、味が濃くて、これまた絶品。

「このカリカリベーコンも……？」

「あ、はい。ここで狩ったオーク肉です。知り合いのお肉屋さんで加工してもらいました。ベーコンとソーセージを作ってもらったんですけど、すごく美味しく仕上がりましたね」

「これがオーク肉だと？」

ルトガーがフォークに刺したベーコンを見下ろす。ちょうどベーコンを飲み込んだゾフィが「ハイオーク肉かと思った」とぼそりとつぶやく。それほどに上等な肉質だったのだ。

「お肉も格別に美味しいのは、さすが食材ダンジョンですよ。オークもボアもディアも上位種と遜色ない味のお肉をドロップするんですよ！」

えへんと胸を張って主張するナギ。自身の魔力をたっぷり吸い上げて、その欲望のままに創られたダンジョンなのだ。自慢したい気持ちが少しばかり暴走している。

ふう、とラヴィルがため息を吐いた。

「この子が生みの親なら、そうなるのも、まあ納得かしら」

ほっそりとした白い指で摘んだブドウの実を口に放り込むと、あら美味しいと微笑む。

食事を終えたミーシャが口元をナプキンで拭う。

「とても興味深いです。なるべく大量に様々な種類の肉、いえ、食材……もとい、素材を採取しましょう。報告の前に試食、んんっ、調査が必要です。ナギ、お願いしますね？」

「あからさますぎだろ、暴虐のエルフ……」

呆れたように呟いたルトガーは、ミーシャにじろりと睨め付けられて、慌てて視線を逸らせた。

「い、いいと思うぞ？ 試食……ちがう、調査は必要だ。ナギ、ぜひ協力を頼む！」

「あ、はい。調理は任せてください！」

「ふふっ。やる気が出るわあ。たっくさん美味しいお肉を狩ってくるわね？」

ダンジョン産食材や調味料を使い、餌付けた結果、心強い狩人^{なかま}が増えました！

やはり、美味しいは正義。あとは珍しい食材や調味料、スパイス類が手に入れば大勝利だろう。

「さ、探索に行くわよー！ 待つてなさい、美味しいお肉！」

上機嫌な白ウサギさんの物騒な掛け声から、食材ダンジョンの調査任務が本格的に始まった。

ハイペリオン・ダンジョン第一発見者の二人には、このダンジョン限定の【自動地図化】スキルがある。フロア全体を見渡せる地図と、魔獣や魔物の位置と種類が分かる便利なスキルだ。

銅級のナギとエドは昇級間近の期待の冒険者で、護衛の師匠二人は金級の実力。メイン探索役の『黒銀』は銀級揃いで攻守に優れている、これまた実力派パーティ。

もはや反則に近いスキルと彼らがいれば、ナギも安心して採取に励めた。

【自動地図化】をさせるエドは『黒銀』パーティに混じり、殲滅班に加わっている。

なので、ナギは師匠二人に挟まれた状態で、黙々とフィールド内の果実や薬草を採取していた。

もちろん、先を歩く連中が倒して出現したドロップアイテムもしつかり拾いながら。

二階層、三階層はホーンラビットとコッコ鳥が出没する。

珍しくもない、弱い魔獣なので当初はスルーしようとしたが、ナギからフロアボスを倒すとレアな薬草と黄金の卵を落とすと聞いて、顔色を変えた。

レアな薬草はエルフであるミーシャが、黄金の卵は『黒銀』の連中が欲しかったのだ。黄金の卵は知り合いの商人が探していたようで、渡りに船だと喜んでいる。

ちなみにラヴィルはコッコ鳥のお肉と巨大な卵狙いで、狩猟に協力した。

「丸々一個を贅沢に使った、ナギ特製のオムレツが食べたいの」

うつとりと表情を蕩^{とろ}けさせながら、そんな発言をかます白ウサギさん。

当然、食いしん坊なエルフも釣られる。

「オムレツも悪くはありませんが、私はオムライスを所望します」

「オムライスもいいわねえ。お肉をたっぷり使ったやつが食べたいわ」

期待に満ちた翡翠色とルビー色の瞳に見据えられ、ナギは早々に陥落した。

「人数分の卵が手に入ったら作ってもいいですよ？」

「やったあ！」

「よく分からんが、コッコ鳥を倒していけばいいんだな？」

「ナギさんが美味しい卵料理を作ってくれるみたいよ、ルトガー」

「美味しい卵料理……」

「分かった、探そう」

全員が張り切ってコッコ鳥を倒し始めたのには驚いた。護衛のはずの二人まで、気配を追って駆け出して行ったのには呆れてしまったが。最年少の二人だけが、ぼつんと残されてしまう。

「まだ三階層だぞ？」

「だよね、エド。どうしよう？」

「とりあえず、セーフティエリアに移動しよう」